

平成27年度 図画工作部会研究計画

1 研究主題

かかわり つながり 自らつくりだす造形活動

～主体的な造形活動を支える指導方法の工夫・改善～

2 研究主題設定にあたって

子どもはものをつくることを好む。砂場で山をつくり、穴を掘ってトンネルに見立てたり、新聞紙を丸めて目をかき込んだり、日常の何気ない場所でもものをつくる子どもの姿を目にする。誰が誘ったのではなく、そこにある材料や場から自分の思いついたもの、つくりたいものをつくり、自分と目の前にある材料や場に入り込んで夢中になって活動している。身近な材料を手にとって眺める、製作途中の作品をじっと見て材料を取り換える、そして、またつくりはじめる。そこには、進んで材料などに働きかけ、そこで見付けたことや感じたことを基に、思考や判断をし、自分の思いの実現を図ろうとする子どもの姿がある。このように、子どもは今まで自分が培ってきた知識・技能を活用して「つくる」。そして、つくりながら新たな考えや思いをもち、思考・判断し「つくりかえる」。この「つくる」と「つくりかえる」との連続した学びによって、自ら新しい形や色をつくりだしていく喜びを味わうことができる。

図画工作部会は、これまでの「かかわり つながり 思いを豊かに表現する造形活動」を研究主題に、子どもが感性を働かせ、形や色、イメージなどをとらえ、これを手がかりに発想し、技能を活用し、表現するという一連の過程を重視し、授業改善につながる指導方法の解明に取り組んできた。そして、子どもが、材料や用具を十分に用いながら試行錯誤したり、製作の手順を考えたりする自己決定の場を設けることで創造的な技能を身に付けさせることや、自己評価や相互評価のあり方を工夫することで、指導方法の改善につながる効果的な実践事例を公開することができた。

しかし、子どもが自ら「表現内容」、「表現材料」、「表現方法」に主体的にかかわり、表現や鑑賞活動を通して、友達や周りの人々と互いの思いを交流し合い、自分の周りの「ひと」「もの」「こと」につながっていく造形活動をより一層展開していく必要がある。また、子どもたちの中には、自分の活動や作品に対し低い自己評価をもち苦手意識が強かったり、自信がもてなかったりして、つくることに抵抗を感じていることがある。そのような子どもも、のびのびとものづくりの楽しさを実感しながら、主体的に活動できるような授業の工夫・改善が求められると考える。

これらの課題を解決するためには、「どのようにして主体的に『表現内容』、『表現材料』、『表現方法』にかかわらせれば、造形活動の基礎的な能力を培うことができるのかということ」と、「どのように自分の周りの『ひと』『もの』『こと』につながらせれば、主体的に造形活動に取り組もうとする意欲や態度を育てることができるのかということ」について解明する必要があると考えた。

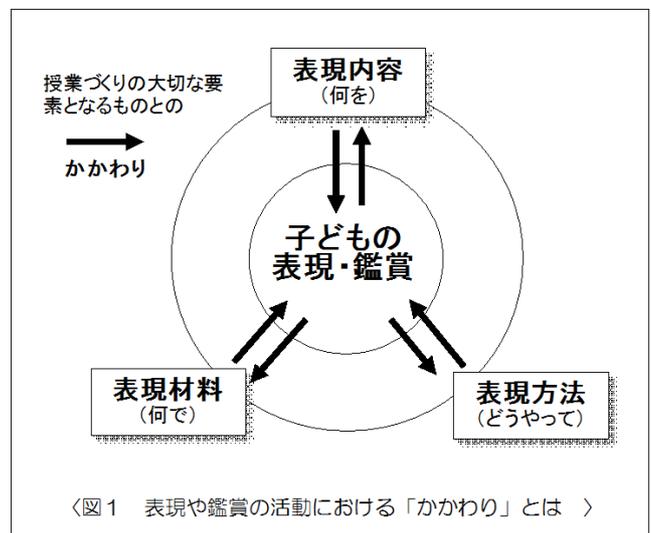
そして、研究主題を「かかわり つながり 自らつくりだす造形活動」、副主題を「主体的な造形活動を支える指導方法の工夫・改善」とし、研究の方向性や具体的な改善策を明らかにし、図画工作科の指導の工夫・改善を図っていく。

3 研究主題についての考え方

(1) 「かかわり」とは

子どもたちは材料や環境などにかかわり、感じたことや思いついたこと、想像したことを造形的に表したり、身近な作品や美術作品などを見て、その面白さやよさ、美しさを感じ取り、見方や考え方を深めたりしていく。

そのために、指導者は、子どもの実態から、各学年の指導事項や〔共通事項〕を考慮し、「表現内容」(何を)、「表現材料」(何で)、「表現方法」(どのように)といった授業づくりの大切な要素



となるものを明らかにし、授業改善や指導方法等の工夫をしていくことが大切になる。

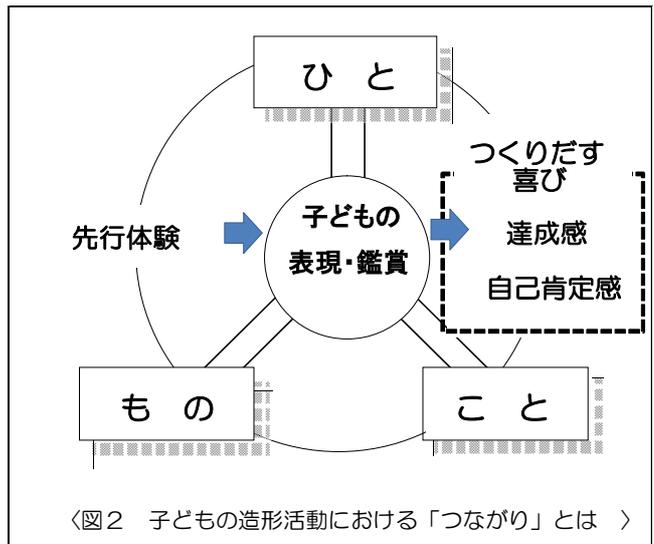
表現活動では、子どもが、この3つの要素を授業の中で、しっかりつかむことにより、自らつくり出す活動が促されると考える。自分の表したいことが決まっている子どもは、主体的に製作に取り組む。また、表したいことがはっきりとしていると、何を使って表すのかということについてかかわっていくようになる。そして、子どもはつくりながら、いろいろと試行錯誤していく。表したいことに向かって、材料を変えてみたり、ぬり方や色を変えてみたりと、「つくる」中で「つくりかえる」が生まれる。

更に、鑑賞活動では、3つの要素を基に友達や自分の作品を見ることにより、自分なりの考えをもったり、感じ取ったりできやすくなる。また、そこで感じた思いや考えたことは、自分の表現活動を広げたり深めたりすることにもなると考える。(図1)

(2) 「つながり」とは

表現や鑑賞の活動では、「ひと」「もの」「こと」とつなげていく場を設定することで、「思った通りにできた」「思いをうまく伝えられた」「つくって喜んでくれた」などといった達成感や自己肯定感が高まり、つくりだす喜びを味わうことができる。学びの喜びを実感させることが、主体的に表現や鑑賞の活動へ取り組む意欲を生み、次の学びへと結びつくことになる。

また、子どもたちが表現や鑑賞の活動を通して交流し、互いの表現の違いやよさを認め合うことで、表現することの楽しさやすばらしさを体感できる活動も重視したい。子どもたちが自分の思いを大切にしたい表現や鑑賞の活動を実現することで、自分の思いが周りの「ひと」「もの」「こと」へとつながっていく。その際、「話したり、聞いたりする」「話し合う」などの場を学習に位置づけ、言語活動の充実を図っていく。(図2)



(3) 「自らつくりだす造形活動」とは

「自らつくりだす造形活動」とは、表現と鑑賞の活動において、子どもたちが形や色などから感じたことを基に自ら働きかけ、自分で新たな意味や価値を主体的につくりだす創造的な活動である。例えば、地面や身近にある紙などに線や形を描いて、描き出された形から自分で意味付けたり、身近な材料の組み合わせ方を試しながら、自分の形や色、イメージに合った組み立て方を工夫してつくりだしたりすることなどである。そこでは、見たり感じたりする力、どのような形にするかを考える力、それを実現するために用具を選び、表現方法を自ら工夫する力などが働いている。そして、つくりだす喜びを味わっている。また、子どもたち自身の造形的な資質や能力が強く発揮されている。

このように表現と鑑賞の活動において、子どもたちは常に形や色などから感じたことを基に、思考・判断し、自己決定を繰り返している。その思考・判断において、自分の感覚や感じ方、表現の思いなど自分の感性を十分に働かせることで自分らしい表現をつくりだしていく。

つまり、表現を自らつくりだしていくためには、表現と鑑賞の活動において自らが思考・判断し、自己決定をしていくよう、指導の工夫・改善をすることが大切である。

(4) 「主体的な造形活動を支える指導方法の工夫・改善」とは

本年度は、特に表現と鑑賞の関連を図った授業づくりに重点を置き、子どもが主体的な造形活動を進められるように指導方法の工夫・改善を行っていく。

表現活動の際に、製作途中の作品をじっくりと見ては、かいたりつくったりすることを繰り返しながら、試行錯誤する子どもの姿が見られる。これは子どもの中で、表現と鑑賞が自然に行き来しながら進められている姿である。見て感じ取ることによって新たな発想が浮かび、「これはもっとこうしたい。」「こんなふうになるんだ。」と、表現と鑑賞を繰り返しながら「つくる」「つくりかえる」ことをしている。

まさに、その活動が造形的な資質や能力を発揮しているのであり、子どもが主体的に造形活動をしているといえる。

そこで、年間計画の中にこのような活動の展開が期待できる題材を効果的に位置付ける。例えば、造形遊びでは、材料・場所のよさや面白さを感じ取るという鑑賞の能力を働かせながら、見る・触る・感じる・考えることで表現が変化し、それをまた感じ取るといった活動が自然と起こっている。このようなことをねらって題材を位置付けることが、「つくる」「つくりかえる」活動を保障することにつながる。と考える。

そのために、授業者は、全ての表現・鑑賞活動が子どもたち一人一人の自己表現であることを踏まえながら、つくることと見て感じる事が相互に関連して働き、形や色などの感じやイメージしたことを基に自らが思考・判断し自己決定することができるよう授業展開や場の設定、授業環境等を工夫する。さらに、体全体を使ってよさを感じ取ることができる題材や発達段階に応じた参考作品の鑑賞題材、身近なものに目を向けて目的や用途を意識できる題材等を意識的に配列する。そうすることが、子どもに自分の表現や感じ方をもたせ、それを他者と交流させることにより、表現や感じ方・考え方のよさや違いに気付いたり、新しい表し方や考え方に気付いたりすることにつながる。このような子ども相互の交流を活性化させることにより、自分の思いを伝えるとともに友達の思いを受け止め、お互いのよさを認め合いながら、感じ取ったことを個々がさらなる表現へと生かしていくことができるよう言語活動の充実を図る。

このような実践を重ねることで、子どもたちにつくり出す喜びや達成感・自己肯定感を味わわせたい。その体験が子どもの自信となり、「ここを見てほしい。」「ここが自分の好きなところなんだよ。」「ここをがんばったよ。」と伝えようとしたり、どのようにつくれば相手が自分の作品のよさを感じ取ってくれるかを考えながら製作しようとしたりするようになる。そして、友達の活動や作品のよさ・面白さを感じ取り、自分と違った発想や表現の工夫に気付いたことから、自分の表現の幅を広げたり、自分の表現に生かしたりして、表現の質が高まっていく。そうした子どもの活動を引き出すよう、授業の中で表現と鑑賞の関連を図った指導を行うことが、主体的な造形活動を支えるものになると考える。

4 研究内容

(1) 発達の段階や系統性を踏まえた指導計画の作成

指導事項や〔共通事項〕を考慮し、各学年で指導すべき内容や事項を踏まえ、題材の焦点化や題材の配列の工夫、適正な評価を考慮し指導計画を作成する。その際、子どもの学習意欲を高めるために、発達段階に応じて、系統性を踏まえた学びが展開できるように工夫する。また、地域の実情や子どもの発達段階に即した適切な題材の設定、各教科等との関連を意識した題材の設定を行うことも大切である。

指導計画の作成の際には、「A表現（1）材料を基に造形遊びをする活動」と「A表現（2）表したいことを絵や立体、工作に表す活動」のバランスや〔共通事項〕の視点から指導計画や内容、方法を検討し、目標を設定し、具体的な指導と評価を考えることにも留意する。

(2) 主体的な造形活動を支えるための指導方法等の改善

○ 表現と鑑賞の関連を図った授業づくり

表現と鑑賞が効果的に生かされる題材や授業展開を考え、自分たちの作品や製作過程の作品、身近な材料、身近な物、美術作品等、学年の目標を考え合わせて、主体的に鑑賞し、表現と関連づけられる対象を選択する。

また、活動の導入・途中・終末などで、子どもが鑑賞の能力を働かせながら対象をとらえ、新たな発想や創造的な技能が高まる場面で表現に関わる鑑賞を行うようにする。

そして活動中には、心に響いたことをメモしたり、ペアや班で感想を伝え合ったりして、言語活動の充実を図りながら、子ども一人一人が自分なりのよさや面白さを見つけられるような声掛けや場面の設定を工夫する。

そのような活動の中で、友達同士互いの見方や感じ方の違いを楽しんだり、表現における表し方の違いやよさを認め合ったりできる学習の場を設定することで、自分の見方や感じ方、表し方に対する自信をもち、更なる表現への意欲をもてるようにする。

○ 子どもが表したいことへの考えや思いをもつための指導方法の工夫

子どもは、ものをつくりながら、感性を働かせ、その活動や作品のよさや面白さ、美しさを感じ取り、ものの見方を深めていく。そこで子どもが、自分の感じ方を大切にするような手立てとして、自らの造形活動を見通したり、振り返ったりする場面の設定や授業展開をする。

例えば、見立て遊びをとおして身の回りにある材料の面白さに気付かせたり、題材との出合わせ方や作品のよさが伝わる提示・掲示の仕方等を工夫したりすることで、子どもが思わずつくりたくなるような気持ちが高まるようにする。

そして、造形活動において、「材料の形や色、イメージにかかわり、どのように表現するのか」や「作品を鑑賞することで、どんなことを感じ取るのか」等、「表現内容」、「表現材料」、「表現方法」を子どもが自分で決める場面を設定することで、自ら思考・判断し、決定していく力を養う。

○ 表したいことを支えるための指導方法の工夫

子どもは、表現活動において、大小の差はあるが表現につまずいたり、行き詰まったり、表現方法を変えようかと迷ったりする。しかし、子どもは、試行錯誤を繰り返し、それらを解決する方法を見つけ、試し、その出来事を乗り越えていこうとする。子どもが安心して、試したりつくり直したりできる学習の場を用意することが大切である。つくりながら、考えが変わったり、それに伴って計画が変わったりしていくことも大切な学びであるということを考慮し、子どもが自ら構想を練り、計画を立てる楽しさを味わえるように学習過程を工夫する。また、ワークシートや対話等を用いた交流を密にし、子どもたちの表現したいことを把握することで、つまずきや困り感を小さくできるようにする。

用具が正しく使えるように発達段階に応じて系統的に指導をしたり、表現に応える材料や用具の使い方の提示や技法の紹介等も適切に行ったりする。

(3) 指導に生きる評価の工夫

評価にあたっては、子ども一人一人が表現活動の中で、どのような力を発揮しているのを見取り、一人一人のよさを認め、子どもたちに表現への自信と喜びを味わわせ、更なる表現への意欲をもたせることが大切である。作品という結果だけでなく、その過程に目を向け、育てたい資質や能力の発揮されている状況を適切に評価することや、共感と支援を行い、子ども一人一人の造形活動への意欲、資質や能力を高める指導につなげていくことが重要となる。そのために、自他の作品や取り組みのよさについて、記述したり話し合ったりする自己評価や相互評価等を用いる。

5 研究方法

- (1) 本年度は研究大会の会場校である鳴門市里浦小学校を中心とする研究組織をつくり研究計画を立てる。また、発表担当の各郡市の研究組織と協働しながら事前研究や授業実践を行い研究内容の解明を図る。里浦小学校では、1～6学年の授業公開と分科会を実施する。

低学年分科会	体全体の感覚や技能を働かせたり、身の回りの作品などから面白さや楽しさを感じ取ったりする活動を通して、「ひと」「もの」「こと」につなげ、自らつくりだす喜びを味わうようにするにはどうすればよいか。
中学年分科会	手や体全体を十分に働かせたり、身近にある作品などからよさや面白さを感じ取ったりする活動を通して、進んで「ひと」「もの」「こと」につなげ、自らつくりだす喜びを味わうようにするにはどうすればよいか。
高学年分科会	想像力を働かせて発想や構想をして表現したり、親しみのある作品などからよさや美しさを感じ取ったりする活動を通して、主体的に「ひと」「もの」「こと」につなげ、自らつくりだす喜びを味わうようにするにはどうすればよいか。

- (2) 各郡市研究会は、研究主題の解明に向けて共通理解を図り、理論研究や授業実践を行う。
- (3) 研究成果をまとめ、研究集録（第52集）を発刊する。